パフォーマンス評価　　実施ガイド

◆「パフォーマンス評価」とは

Here We Go! では、「話すこと【やり取り】」「話すこと【発表】」を中心とした「発信する」活動についての総括的な評価を残すための場面のことを指しています。

◆「評価規準」と「評価基準」

各単元の冒頭に掲げられているのが「評価規準」で、「つけたい力」のことを指しています。それに対して「評価基準」とは「どの程度到達できたか」を判断する指標のことをいいます。評価はその基準に照らして行うことが大切です。

◆パフォーマンス評価のタイミング

Here We Go! では、各 Unit のゴールに設定されている言語活動および年間で 3 回設定されている You can do it!の言語活動をパフォーマンス評価の場面として想定しています。

Unit のゴール活動：十分な指導と学習の後に、単元での学習を総括的に見取る。

You can do it!：それぞれの言語活動の達成のためにつけたい力がついているかどうかという観点で見取る。いくつかの Unit の学習のまとめとして評価する場面として活用するとよい。

◆ねらいと留意点

パフォーマンス評価を通して、児童の「できた感」「達成感」を積み上げることで英語の使用や次の学習への動機付けにつなげ、また教師の指導改善へと生かすことがねらいです。

評価時にすべての児童が自信を持ってゴール活動に臨めるよう、単元を通した指導が必要となります。単元はじめにゴール活動の際に必要となる力を把握し、ゴール活動に向けて活動を設計（バックワードデザイン）するとよいでしょう。

評価の際には、評価者によって評価のずれが生じることは避けなくてはなりません。そのためには、学年単位で評価基準を決めておくことが大切です。A や B のレベルがどのようなパフォーマンスをするのかを想定して、具体的な発話を「ベンチマーク」として書き起こしておくと共有が可能になります。評価する際は、この「ベンチマーク」をもとに、一人一人のパフォーマンスを A や B と評価していくとよいでしょう。

◆評価基準表「ルーブリック」とパフォーマンスイメージの共有

パフォーマンス評価にあたっては、単元で「つけたい力」に対して「どの程度到達できたか」を判断するために、指導者間で共有する指標が必要となります。評価のずれを防ぐためには、「ルーブリック」と呼ばれる評価基準表を用意するとよいでしょう。指導者は観点別評価の 3 観点のそれぞれにおいて、つけたい力を踏まえて具体的に何を見取るのかといったポイントとなる評価項目を設定し、児童のパフォーマンスを見取るようにします。本ウェブサイトでは、各単元の「ルーブリック」例**と作成のためのひな型とを提供していますので、学習状況や児童の実態に合わせて、各先生方でルーブリックの文言を調整しながらお使いください。

また、指導者は評価をする前に、どのような点からどの程度のパフォーマンスを期待されているのか、児童と評価項目および評価基準を共有することが大切です。例えば改善点を含むパフォーマンスの例を指導者が演じた後で、ゴール活動のモデル動画を視聴するなどして、児童にどの点がよいのかを気づかせ、評価される項目の具体的なイメージを掴ませるようにします。それにより、児童は自分なりに練習したり目標を調整したりすることが可能になります。これは 3 観点のうちの「主体的に学習に取り組む態度」の学習調整の側面を評価するのにつ

ながるものです。

**「話すこと【やり取り／発表】」では教科書二次元コードから見ることのできるモデル動画を「A」相当、「書くこと」では教科書紙面掲載の成果物例を「B」相当と想定して作成してあります。

◆評価の流れ

指導者は以下のような流れで、Unit のパフォーマンス評価を行うとよいでしょう。

タブレットなどのデジタル機器が活用できる場合には、中間評価でパフォーマンスを録画したものを見ながら改善点を話し合わせ、単元末までねばり強く学習改善を行なわせます［形成的評価］。そして、一番よくできたパフォーマンス動画を提出させ、評価するとよいでしょう［総括的評価］。

❶授業準備

・Unit のゴール活動と評価規準（「つけたい力」）を確認し、「（児童を）こういう姿までもっていきたい」というイメージを評価者間でしっかり共有しておく。
・評価項目と評価基準を考えながらルーブリックを作成する。
・パフォーマンス評価を行うゴール活動の内容や評価基準を児童と共有し、目標に向けて各児童がねばり強く活動に取り組めるよう、具体的なゴールの姿を掴ませる。
・最終のゴール活動に向けて必要な力を段階的につけるような活動を組み込むなど、言語活動を「逆向き設計」する。

❷授業内や電子機器を活用した事前活動

・Step 1,2 の Let’s try.や Plus One を活用し、児童が自分の学習スタイルに合った方法で、よりよく学べるような自己調整の時間を取ったり、指導者が効果的な学習の場を設定し、児童が自分の意思で選択して学べるようにするなど、個別最適な学びのデザインを工夫する。
・児童は電子機器を活用して自分たちの発表やり取りの様子などを録画する。その映像をクラス内で共有して、どのようにしたらよりよい発表ややり取りになるかを考えさせる。
・C 評価が付くことが予想される児童には、ゴール前の言語活動において、繰り返し形成的評価を行ないながら、個別にサポートを行う。その際、何が難しいと感じるか、どのような足場があればできそうか、児童と対話し、指導者が「伴走者」として児童を支えるようにする。

❸パフォーマンスの実施あるいは動画の提出

・「話すこと【やり取り】」では、質問に答えることだけでなく、自ら相手に質問することも大切な要素となる。児童同士のやり取りのうち、返答だけではなく、質問についても見取るようにする。児童同士のやり取りでの見取りをする場合、特定のペアだけで見取るのではなく、ペアを変えて複数回見取りを行なうと、相手により評価結果に差が出ることをある程度解消することができる。また、ALT や指導者と 1 対 1 でのやり取りをするなど、評価の妥当性を考慮するとよい。
・「話すこと【発表】」では、グループ発表であっても、児童一人一人が発話するよう促す。人前で発表することに抵抗感がある児童がいる場合には、タブレット端末で録画をさせたものを評価に用いるなど、児童の心理的負担にも考慮できるとよい
・「書くこと」については、Step1, 2 の Let’s write and read.で自分が書いた内容や、教科書紙面に掲載されている成果物例を参考にさせるとよい。

❹事後指導

・よい例をクラス全体で共有し、指導者からよかったところをフィードバックする。
・児童に振り返りの機会を与え、指導者は振り返りの記述等を参考にして次回の指導に生かす。